

高校生用日本語語彙理解力テストの開発

——(1) 試作問題の精選——

平 直樹*

小野 博**

林部 英雄***

日本語に関し特別な指導を必要とする帰国子女の日本語能力を簡便に測定するテストの開発が急務となっている。

小野他(1989)は小学生及び中学生用に、日本語能力のうち、語彙、文型、作文、漢字等の評価基準を作成している。そのうち、語彙と漢字については高校生段階以上のテストの作成が容易である。それ以外の領域については、中学生段階で発達が完成するものがほとんどであり、作文については、大量の統計的処理が困難である。

今回の研究は高校生用語彙テストの項目の一部を作成するのが目的である。項目の作成・改良には、予備調査と本調査の2段階を経た。

まず、将来の中学生用語彙テストと連続する尺度化をにらみ中学生用の項目も含めて、90項目を作成した。

予備調査として、1991年5月、東京都内の中堅上位私立女子高校に依頼し、一年生から三年生まで計約270名の被験者にテストを行った。古典的テスト理論に基づき、項目得点と総得点との相関関係から簡便な項目分析を行った結果、一部改良した項目も含め、本調査用に73項目を選択した。

本調査では、全国の28の高校計約18,000名の被験者にテストを行った。協力校の内訳は、東京都内の有名私立進学校3校、全国の中堅上位公立普通科高校21校、地方の商業高校1校、農業高校3校である。

得点率は、平均54.79、標準偏差12.53であり、全体として高校生段階の標準的なテストの作成に成功したと考えられる。次に、項目分析を行った。項目得点と総得点の相関関係と同時に、得点から5段階に被験者(1段階について被験者約3,300名から3,900名)を分類し、選択肢毎の選択率の情報も合わせて56項目を良好項目として選択した。

小学生及び中学生用の項目は項目反応理論に基づいて尺度化されている。今後、項目反応理論に基づいて中学生用項目と連続した尺度化を行う。また、項目を増やして、最終的には数百項目からなるテストを作成し、帰国子女の語彙能力を判定するための適応型テストに組織化して、帰国子女の進学指導、語彙能力発達の追跡調査等に役立てたい。

* 大学入試センター研究開発部 試験方法研究部門

** 大学入試センター研究開発部 特別試験研究部門

*** 横浜国立大学 教育学部

大学入試センター研究紀要 No. 21, 1992, p. 107~135 (平成4年1月9日受付)

© 1992 THE NATIONAL CENTER FOR UNIVERSITY ENTRANCE EXAMINATION

I. 問 題

日本経済の発展により、海外に居住して経済活動を行う日本人の数は激増している。それに伴い、海外駐在員家族などとして一定期間海外に滞在し、その後帰国するいわゆる帰国子女の数も激増している。その大半は、日本国内での大学等への進学を希望する。実際、大学入試の多様化が進む中、いわゆる帰国子女入試枠を特別に設ける学校が増えてきている。特に、新たに帰国子女入試枠を設定しようと試みている大学の場合、大学入学の適性をどのように判定すべきか苦慮しているのが現状であろう。

その中で、特に、問題となるのは帰国子女の日本語の能力である。海外渡航の時期、期間、場所、生活環境等によって、日本語能力の発達が十分に保障されずに帰国する者がいると考えられる。それらの者も一旦大学に入学したからには、一般入試を経て入学してきた学生と同様に日本語で講義を受け、ゼミで発表し、試験を受け、レポートを書く必要がある。したがって、帰国子女の中には大学生生活に適応するためには、大学側が入学後に特別な配慮を考えない限り、大学生活の特に学業面で不適応を起こす可能性がある者が多数含まれていると考えざるを得ない。

高校生段階の帰国子女の中には、日本語能力が同年令の高校生の標準的な水準を保っている者から、その能力がかなり劣る者まで混在していると思われる。また、中には日本語の発達の仕方が外国語的な者もあるかもしれない。したがって、そのような様々な水準、特性の日本語能力を的確に診断できるテストが必要である。さらに、今後一層帰国子女が増えるとするならば、そのテストは簡便に実施でき、集団テスト的利用や時間的経過を追った追跡調査への利用に耐えるものである必要

がある。

小野他(1989)では、日本語能力の標準化に関する研究が行われた。総合的な日本語力の評価基準を作成するため、(1)語彙、(2)助詞、(3)漢字、(4)文型、(5)作文、(6)指示語、(7)前提、(8)含意の8領域について、約20万人の小・中学生に調査を施し、各領域の発達基準を標準化した。さらに、海外在住子女、帰国子女に日本語語彙理解力テスト(芝, 1978)、英語語彙理解力テスト(The Word Book Dictionary, 1974)を施し、以下のような知見を得ている(小野, 1989)。帰国子女のうち、小学生の場合、海外での滞在年数、帰国時の学年、日本語語彙力にあまり関係なく、日本語習得の努力を行えば、語彙力が急激に伸びる場合が多いことが分かった。さらに、生活空間が英語圏の海外在住の児童・生徒は、滞在1~2年で英語の日常会話には不自由しなくなるが、学習言語が年令相応に達するためには、少なくとも3~4年かかり、習得前に帰国する子供が多いことが分かった。また、帰国後の英語語彙力は日本語語彙力が伴わない場合、滞在年数、帰国時の学年及び帰国時の英語語彙力にあまり関係なく急激に低下することが分かった。

しかしながら、小野他(1989)では、高校生段階以上の日本語能力の検査は作成されておらず、また、様々な水準の被験者に対応できるような、易しい項目から難しい項目まで広範囲な項目プールを持った適応型テストの作成も今後の課題として残されている。

以上のような知見を基に、大学入試との関係の深い、高校生段階の日本語力テストを作成することを将来の目的とし、その第一歩として本研究を位置づける。

II. 研究の目的

小野他(1989)で挙げられた日本語能力の領域のうち、簡便に作成、実施できるものとして、語彙及び漢字のテストがある。この二つの領域の中から、まず、高校生段階の語彙能力を測定する項目を作成する。小・中学生用の語彙能力テストは全て五肢選択形式で、項目反応理論(IRT)に基づき、2パラメタ・モデルで尺度化されている。したがって、本研究で作成するテスト項目もその形式を踏襲し、将来的には小・中学生用の項目と尺度の接続を行う予定である。

帰国子女の語彙能力を測定する簡便なテストを作成するためには以下のような過程を踏んで研究が進められる必要がある。

1. 高校生段階の語彙に関する五肢選択形式のテスト項目を作成する
2. 実際に高校生に実施、項目として適切なものを選ぶ
3. 小・中学生の項目と尺度の等化を行う
4. 既に作成、等化された項目を軸に、項

目プールを増やす

5. 帰国子女の語彙能力を測定するための簡易テスト(適応型テスト)を作成する

今回は、そのうち1,2の段階までの研究成果を報告する。なお、作成された項目の内容に関しては、一般に知られることによってその特性が変化することを恐れ、現段階では原則的に非公開とし、本稿にも全貌を掲載しないこととする。

III. 方法

1. 項目の作成

本研究で作成したテスト項目は、全て幹に示された単語と最も近い意味のものを五つの選択肢から選ばせるものである。漢字の読み能力の影響を防ぐために、漢字にはすべて平仮名でルビをふった。図1に項目の例を示す。

中学生用の項目の項目分析の資料から、困難度、識別力を参考に、国語辞典、新聞、小

きょうじ 52. 矜持	にんたい ① 忍耐	がんこ ② 頑固	はこ ③ 誇り
	きもの ④ 着物	しろう ⑤ 思想	

図1. 項目例

次のことばに一番意味の似ているものを、(1, 2, 3, 4, 5)の中から1つだけ選んで、その番号に○を付けなさい。意味の似ているものが1つより多くある時は、1番良いと思ったもの1つだけに○を付けて下さい。

図2. 予備調査の教示

表 1-1 項目分析結果—(予備調査)

	項目番号	幹	正答選択肢	正答者数	困難度 (%)	識別力
× × △ × ×	1	まどろむ	4	217	81.0	0.364
	2	厳密な	2	160	59.7	0.134
	3	拙い	1	153	57.1	0.304
	4	皆無	4	197	73.5	0.224
	5	逃亡	5	252	94.0	0.143
	6	受理する	1	209	78.0	0.093
	7	試案	1	182	67.9	0.031
	8	穏健な	1	158	59.0	0.027
	9	円滑に	2	185	69.0	0.367
	10	たしなめる	5	147	54.9	0.235
	11	仰々しい	3	200	74.6	0.365
	12	あらゆる	4	149	55.6	0.178
	13	奏でる	4	238	88.8	0.250
	14	風潮	2	235	87.7	0.254
	15	不快な	2	236	88.1	0.162
	16	すこぶる	1	219	81.7	0.314
	17	臨む	3	223	83.2	0.048
	18	やましい	5	203	75.7	0.242
	19	目下	2	189	70.5	0.448
	20	おびただしい	4	222	82.8	0.457
	21	かこつける	3	170	63.4	0.398
	22	露骨に	3	228	85.1	0.428
	23	月並みな	5	236	88.1	0.295
	24	ねぎらう	3	105	39.2	0.489
25	一途	2	246	91.8	0.307	

表 1-2 項目分析結果一(予備調査)

項目番号	幹	正答選択肢	正答者数	困難度 (%)	識別力	
26	さげすむ	1	226	84.3	0.374	
27	助言	4	211	78.7	0.153	
28	合点	5	209	78.0	0.389	
29	自肅する	3	241	89.9	0.350	
30	矢継ぎ早の	3	212	79.1	0.378	
31	毅然とした	4	210	78.4	0.421	
32	つれない	1	184	68.7	0.326	
33	左遷	5	177	66.0	0.421	
34	碩学	4	196	73.1	-0.01	
×	35	括目	1	109	40.7	0.035
	36	掣肘	1	45	16.8	0.035
	37	一蹴する	5	143	53.4	0.242
	38	桎梏	2	88	32.8	-0.16
	39	冒濫	2	149	55.6	0.321
×	40	侮る	3	74	27.6	-0.16
	41	形而上	1	9	3.4	0.026
	42	角が立つ	2	168	62.7	0.343
×	43	陶冶する	2	121	45.1	0.047
	44	鼓舞する	5	133	49.6	0.131
	45	厭わない	2	162	60.4	0.511
×	46	睡魔	4	262	97.8	0.179
	47	辟易する	1	172	64.2	0.315
	48	刹那	5	167	62.3	0.359
	49	のっけから	4	236	88.1	0.341
	50	相好	2	28	10.4	0.255

入力ミス

入力ミス

表 1-3 項目分析結果一(予備調査)

項目番号	幹	正答選択肢	正答者数	困難度 (%)	識別力
51	拮抗する	1	134	50.0	0.166
52	鏡舌	4	141	52.6	0.447
53	蒙昧	5	40	14.9	0.007
54	辣腕	2	145	54.1	0.208
55	屈託がない	4	231	86.2	0.272
56	卒然と	3	68	25.4	0.083
× 57	掌	5	64	23.9	-0.01
58	呻吟する	2	41	15.3	-0.02
59	傾倒する	3	88	32.8	0.322
60	邂逅する	1	74	27.6	0.350
61	矜持	3	95	35.4	-0.06
62	僭越	3	154	57.5	0.180
63	二の腕	2	66	24.6	0.140
64	地道に	2	235	87.7	0.186
65	血道をあげる	3	46	17.2	0.029
66	惹起する	3	50	18.7	-0.043
67	抱腹絶倒	3	124	46.3	0.357
68	袖の下	4	156	58.2	0.383
× 69	ほのかに	2	252	94.0	0.166
70	無常	5	94	35.1	0.281

説などを利用して、中学生用の項目も 28 項目含む計 90 項目のテストを作成した。中学生用の項目を含むことにしたのは、将来、共通尺度化の際に必要なからである。

2. 予備調査

本研究では、予備調査と本調査の 2 段階を経た。

予備調査の実施時期は、1991 年 5 月中である。被験者は、東京都内にある中堅上位の私立女子高等学校 1 年生～3 年生計 268 名である。内訳は、1 年生 87 名、2 年生 90 名、3 年生 91 名である。

予備調査では、電話で調査を依頼し、テスト用紙を郵送した。授業時間中にテストは行われ、テスト用紙に解答が直接書き込まれた。

表 1-4 項目分析結果一(予備調査)

	項目番号	幹	正答選択肢	正答者数	困難度 (%)	識別力
×	71	怪訝	3	183	68.3	0.441
	72	拘束する	4	249	92.9	0.323
	73	息災	3	38	14.2	0.312
	74	やみくもに	3	194	72.4	0.165
×	75	会釈	3	265	98.9	-0.01
	76	海千山千	4	96	35.8	0.106
×	77	典型	5	248	92.5	0.275
×	78	口説く	2	143	53.4	0.038
	79	巧拙	5	199	74.3	0.284
×	80	うかつ	3	246	91.8	0.259
×	81	つかのま	2	262	97.8	0.171
	82	難渋	5	202	75.4	0.231
×	83	身柄	5	170	63.4	0.348
	84	案の定	3	260	97.0	0.186
	85	やっきになる	3	38	14.2	0.201
	86	贅を尽くす	4	125	46.6	0.432
	87	隔週	4	177	66.0	0.359
	88	狼狽	3	194	72.4	0.372
	89	邪険	5	132	49.3	0.429
	90	他愛ない	4	209	78.0	0.484

被験者に示された教示は図2に示す通りである。テスト用紙は郵送で回収した。その際、項目を非公開とするため、余りの用紙も全て回収した。

平均得点率は全学年合計で61.4% (平均55.3点) であり、高校生段階の標準的な語彙理解力テストとしては全体として問題はなかったと思われる。

3. 予備調査の項目分析結果

予備調査の項目分析結果を表1に示す。項目分析は古典的テスト理論に基づいて行った。表中の困難度とは項目通過率(%), 識別力とは当該項目の正答・誤答と総得点との点双列相関係数である。ただし, 正答は1点, 誤答は0点とし, 総得点からは当該項目の得点

は除いてある。また、欄外の×印は採用されなかった項目、△印は改良を加えた項目である。

4. 項目の選択と改良

予備調査で実施した90項目のうち、本調査には72項目をそのまま採用し、1項目のみ選択肢に改良を加えた。17項目の除外は、識別力と困難度の双方を勘案して決定した。まず、得点率が90%を大きく越える項目は、識別力の如何に関わらず除外することとした(5. 逃亡, 46. 睡魔, 69. ほのかに, 72. 拘束する, 75. 会釈, 77. 典型, 80. うかつ, 81. つかのま, 84. 案の定の9項目が該当)。次に、識別力の不十分なもののうち、正答の解釈が曖昧であったり、誤答選択肢の作成が困難なもの

を除外した(6. 受理する, 8. 穏健な, 35. 括目, 40. 侮る, 43. 陶冶する, 57. 掌の6項目が該当)。次に、識別力が不十分なものうち、困難度が比較的低い(すなわち、通過率が高い)ものを除外した(17. 臨む, 78. 口説くの2項目が該当)。選択肢に改良を加えた項目は7. 試案である(以上、表1参照)。なお、34. 碩学は、データ入力の手続きの際にミスが発見されたため、計算上は、識別力に問題があるが、本調査に加えることとした。また、38. 桎梏, 53. 蒙昧, 58. 呻吟する, 61. 矜持, 66. 惹起するなど、識別力が著しく悪い項目も、本調査で上位群の識別力に期待して削除しなかった項目もある。

表2-1 本調査の被験者

北海道立A高校	1年生	488名	東京都内私立 男子H高校	1年生	104名
	2年生	538名		2年生	100名
	3年生	508名		3年生	93名
北海道立B高校	1年生	138名	東京都内私立 女子I高校	1年生	148名
	2年生	121名		2年生	139名
	3年生	128名		3年生	139名
福島県立C高校	1年生	178名	神奈川県立J高校	1年生	79名
	2年生	272名		2年生	123名
	3年生	259名		3年生	87名
福島県立D女子高校	1年生	447名	富山県立K高校	1年生	128名
	2年生	489名		2年生	127名
	3年生	471名		3年生	131名
千葉県立E高校	1年生	133名	長野県立L農業高校	1年生	38名
	2年生	131名		2年生	35名
	3年生	130名		3年生	36名
千葉県立F高校	1年生	364名	長野県立M農業高校	1年生	28名
	2年生	353名		2年生	25名
	3年生	368名		3年生	35名
東京都内私立 男子G高校	1年生	245名	長野県立N農業高校	1年生	39名
	2年生	244名		2年生	39名
	3年生	232名		3年生	35名

5. 本調査の実施手続き

以上のようにして作成された73項目から成る語彙テストを用いて本調査を実施した。

本調査の調査時期は、1991年7月～10月である。被験者は表2に示すように、全国28の高校の生徒計18,293名である。学校の内訳は、東京都内の有名私立進学男子高校2校、女子高校1校、全国の各地区における中堅上位の公立普通科高校21校、地方の商業高校1校、農業高校3校である。これらの学校の選択理由は、まず、大学進学を目指す標準的な高校生の集団を確保したかったことが挙げられる。さらに、被験者の能力分布が広範囲に渡った方が、良好な項目の識別力が的確に確保できるという利点がある。また、難易度の

高い大学の入試を鑑みた場合、高校生としては語彙能力の高いと思われる集団が必要であり、中学生用項目との接続を考えた場合、高校生としては語彙能力が低いと思われる集団も一定数確保する必要があった。

本調査は全て書簡と電話で実施を依頼した。また、データの処理が膨大な量となるため、マークシートを作成し、そこに解答を記入させることとした。テスト用紙とマークシートは郵送した。授業時間中にテストは行われ、解答はマークシートに記入された。被験者に示された教示は図3に示す通りである。解答は郵送で回収した。その際、項目を非公開とするため、テスト用紙も全て回収した。

表2-2 本調査の被験者

長野県立O高校	1年生 35名 2年生 33名 3年生 46名	香川県立V商業高校	1年生 133名 2年生 127名 3年生 129名
岐阜県立P高校	1年生 356名 2年生 413名 3年生 402名	高知県立W高校	1年生 133名 2年生 130名 3年生 127名
岐阜県立Q高校	1年生 400名 2年生 416名 3年生 414名	高知県立X高校	1年生 131名 2年生 258名 3年生 127名
三重県立R高校	1年生 448名 2年生 439名 3年生 483名	熊本県立Y高校	1年生 129名 2年生 135名 3年生 131名
三重県立S高校	1年生 134名 2年生 132名 3年生 134名	熊本県立Z高校	1年生 132名 2年生 254名 3年生 266名
広島県立T高校	1年生 132名 2年生 134名 3年生 274名	沖縄県立ヲ高校	1年生 131名 2年生 134名 3年生 127名
香川県立U高校	1年生 439名 2年生 446名 3年生 441名	沖縄県立S高校	1年生 494名 2年生 486名 3年生 483名

次のことばに一番意味の似ているものを、① ② ③ ④ ⑤の中から1つだけ選んで、マークシートの回答欄にマークしなさい。意味の似ているものが1つより多くある時は、一番良いと思ったもの1つだけにマークして下さい。問題数は全部で73問です。問題番号と回答番号がずれないようによく注意して下さい。

図3. 本調査の教示

IV. 結 果

以上のようにして、収集したデータから、本調査における項目分析を行った。本調査の得点率は平均 54.79、標準偏差 12.53(平均 41.00 点、標準偏差 10.52)であり、全体としては標準的な高校生用の語彙テスト項目の作成に成功したといえる。

本調査の項目分析においては、予備調査のような困難度と識別力の分析に加え、被験者集団をその得点によって5段階に分類し、各段階における選択肢ごとの選択率も調べた。分類に関する情報は、表3に示す通りである。

その結果、最終的に17項目を不良項目として除外し、56項目を高校生用の語彙理解力テスト項目として採択することとなった。採択の基準としては、識別力が.25以上である、ま

たは、最上位群と最下位群の得点率の違いが30%以上のものとした。芝(1991)では、予備分析において、識別力.25以下の項目を修正の対象としているが、ここでは、基本的にその方法を踏襲している。ただし、本研究では、被験者が非常に多いので、選択肢毎の分析も重んじ、被験者の得点によるG-P分析も採用して、最上位群と最下位群の得点率差の情報も項目選択の基準に利用している。

表4に本調査の項目分析結果を示す。左側欄外に「×」印を付した項目は項目分析の結果、不良項目として除外されたものである。また、右側欄外に「●」印を付した項目は、最上位群と最下位群の正答率の差が30%を越えているため不良項目ではないが、識別力が.25に満たないもの、「<30」印を付した項目は、識別力が.25を越えているために不良項目で

表3 G-P分析の群分類

	得点	人数	百分率
最下位群	0～32点	3957 人	21.6%
下位群	33～38点	3485 人	19.1%
中位群	39～44点	3957 人	21.6%
上位群	45～50点	3338 人	18.2%
最上位群	51～73点	3556 人	19.4%

表 4-1 項目分析結果一(本調査)

項目番号	幹	正答選択肢	正答者数	困難度 (%)	識別力	
×	1	まどろむ	4	11636	63.7	0.292
	2	厳密な	2	10505	57.5	0.151
	3	拙い	1	8079	44.5	0.306
	4	皆無	4	12673	69.5	0.279
×	5	試案	1	12600	69.1	0.055
	6	円滑に	2	11533	63.2	0.399
	7	たしなめる	5	7195	39.5	0.408
	8	仰々しい	3	11461	63.0	0.363
	9	あらゆる	4	11051	60.5	0.232
	10	奏でる	4	14795	81.1	0.377
	11	風潮	2	16093	88.1	0.279
	12	不快な	2	14507	79.4	0.358
	13	すこぶる	1	14304	78.4	0.367
	14	やましい	5	13599	74.5	0.326
	15	目下	2	13029	71.4	0.428
	16	おびただしい	4	13796	75.6	0.436
	17	かこつける	3	12696	69.6	0.388
	18	露骨に	3	13945	76.4	0.433
	19	月並みな	5	13782	75.6	0.418
	20	ねぎらう	3	9540	52.3	0.500

●

< 30

はないが、最上位群と最下位群の正答率の差が30%にみえないものである。

表5には、各選択肢の選択率を示す。欄外の印は表4と同様である。

表6には、各選択肢毎の識別力(該当する選択肢を選んだ場合1、それ以外を0としたときの、当該項目を除いた総得点と当該項目との点相列相関係数)を示す。正答選択肢に

はアンダーラインを付してある。また、欄外の印は表4と同様である。

1. 不良項目の分析

項目分析の結果、不良項目として除外された項目の特徴は主に以下の6種類のタイプに分類できる。それは、以下に述べるとおり、

1. 困難度が高すぎる項目

表 4-2 項目分析結果—(本調査)

項目番号	幹	正答選択肢	正答者数	困難度(%)	識別力	
21	一途	2	15791	86.4	0.326	
22	さげすむ	1	15326	84.0	0.358	
23	助言	4	14242	78.0	0.274	
24	合点	5	14553	79.8	0.409	
25	自粛する	3	16258	89.0	0.380	
26	矢継ぎ早の	3	14604	80.1	0.367	
27	毅然とした	4	13985	76.7	0.390	
28	つれない	1	9403	51.5	0.442	
29	左遷	5	13171	72.3	0.435	
30	碩学	4	7938	44.0	0.187	
×	31	掣肘	1	4547	25.2	0.071
	32	一蹴する	5	10564	58.3	0.380
×	33	桎梏	2	6113	33.9	-0.027
	34	冒瀆	2	10710	58.9	0.381
×	35	形而上	1	1558	8.6	0.135
×	36	角が立つ	2	11299	62.0	0.286
	37	鼓舞する	5	9536	52.7	0.169
	38	厭わない	2	10163	56.0	0.446
	39	辟易する	1	10894	60.3	0.366
	40	刹那	5	13351	73.4	0.331

2. 一貫して選択率の高い選択肢がある項目
3. 困難度が低すぎる項目
4. 正答のような傾向を示す誤答選択肢がある項目
5. 識別力が若干足りない項目
6. 識別力がなく、その理由も不明な項目である。1と2は要するに得点率が低く、困難

度が高い項目であるが、1では誤答選択肢の選択状況が分散しているのに対し、2では選択率の高い選択肢があるという点が異なる。4の「正答のような傾向」とは、被験者の得点が高くなるにつれて選択率が高くなるということである。6の「理由が不明」とは、普通、被験者がランダムに当て推量を行った場合、当て推量の対象となった誤答選択肢と正答選

表 4-3 項目分析結果一(本調査)

項目番号	幹	正答選択肢	正答者数	困難度 (%)	識別力		
41	のっけから	4	15099	82.8	0.348		
42	相好	2	2375	13.1	0.252	< 30	
43	拮抗する	1	10289	56.8	0.226	●	
44	饒舌	4	9785	53.9	0.337		
×	45	蒙昧	5	2851	15.8	0.087	
	46	辣腕	2	9807	54.4	0.233	●
×	47	屈託がない	4	6188	34.0	-0.044	
×	48	卒然と	3	4225	23.3	0.085	
×	49	呻吟する	2	2251	12.5	-0.023	
	50	傾倒する	3	7220	40.0	0.306	
×	51	邂逅する	1	3177	17.6	0.159	
×	52	矜持	3	7022	39.1	-0.015	
	53	僭越	3	9599	53.2	0.233	●
	54	二の腕	2	3718	20.5	0.332	
×	55	地道に	2	16145	88.7	0.190	
×	56	血道をあげる	3	3416	18.9	0.042	
×	57	惹起する	3	3306	18.4	-0.035	
	58	抱腹絶倒	3	10489	58.0	0.352	
	59	袖の下	4	12707	70.1	0.381	
	60	無常	5	7044	38.8	0.325	

択肢の選択率が近くなるはずだが、6に含まれる項目は、得点の低い者から高い者まで一貫してランダムとは思えない程度に高い正答率が得られ、しかもそれが得点の高低に関わらずほぼ一定であるという性質を持つ。その点が、ある程度の識別性が見られる5の項目と異なる。

1. 困難度が高すぎる(すなわち、難しすぎる項目): 4例

33. 桎梏

図4に示すように 33. 桎梏 は、正答選択肢が2の「自由を奪うこと」であるが、最上位群から最下位群まで一貫して30%強の選択率である。当て推量で選択肢4の「責任をとらせること」と区別がつかなかった

表 4-4 項目分析結果一(本調査)

項目番号	幹	正答選択肢	正答者数	困難度 (%)	識別力	
×	61	怪訝	3	11303	62.4	0.397
	62	息災	3	3878	21.5	0.305
	63	やみくもに	3	13987	77.0	0.172
	64	海千山千	4	7369	40.9	0.232
	65	巧拙	5	11474	63.8	0.324
×	66	難渋	5	12464	69.3	0.197
	67	身柄	5	12612	69.5	0.368
	68	やっきになる	3	3990	22.1	0.246
	69	贅を尽くす	4	9130	50.6	0.428
	70	隔週	4	10029	55.9	0.284
	71	狼狽	3	14000	77.6	0.393
	72	邪険	5	7335	40.8	0.418
	73	他愛ない	4	14910	83.0	0.378

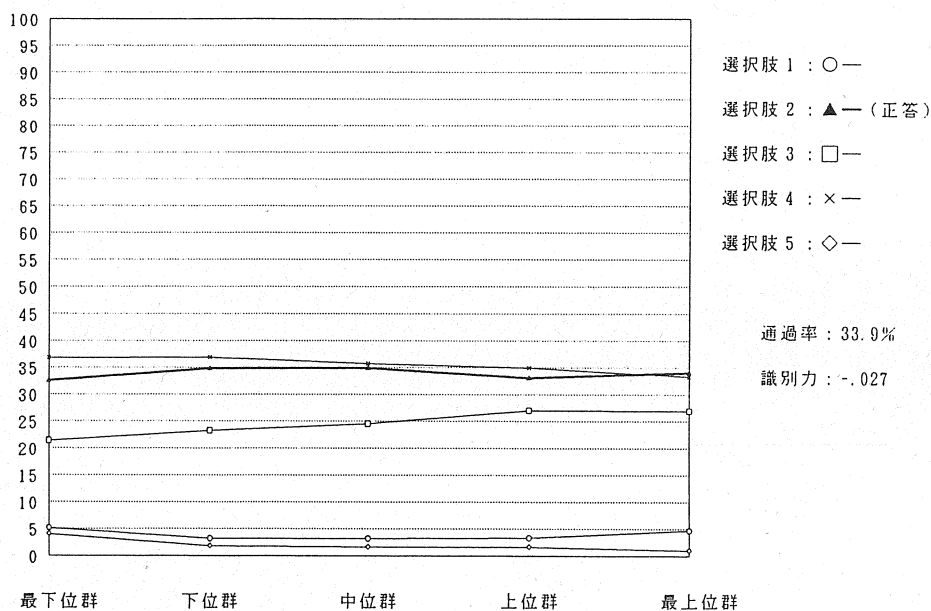


図 4. 項目 33 (怪杓) の G-P 分析 (不良項目)

表 5-1 選択肢毎の選択率—(本調査)

項目番号	幹	選1	選2	選3	選4	選5
1	まどろむ	13.3%	1.0%	20.2%	<u>63.7%</u>	1.7%
×	2	厳密な	17.0%	<u>57.5%</u>	2.5%	6.1%
	3	拙い	<u>44.5%</u>	17.0%	2.6%	18.2%
	4	皆無	4.0%	1.6%	2.1%	<u>69.5%</u>
×	5	試案	<u>69.1%</u>	2.3%	0.6%	24.5%
	6	円滑に	9.4%	<u>63.2%</u>	7.5%	1.2%
	7	たしなめる	11.2%	1.8%	6.4%	41.0%
	8	仰々しい	14.5%	2.2%	<u>63.0%</u>	14.2%
	9	あらゆる	4.7%	19.7%	14.7%	<u>60.5%</u>
	10	奏でる	1.7%	0.5%	10.2%	<u>81.1%</u>
	11	風潮	5.0%	<u>88.1%</u>	0.5%	5.7%
	12	不快な	0.5%	<u>79.4%</u>	9.4%	6.5%
	13	すこぶる	<u>78.4%</u>	4.0%	2.7%	5.2%
	14	やましい	1.8%	13.4%	4.0%	6.3%
	15	目下	1.4%	<u>71.4%</u>	4.4%	5.3%
	16	おびただしい	9.9%	9.6%	3.8%	<u>75.6%</u>
	17	かこつける	0.7%	2.4%	<u>69.6%</u>	23.9%
	18	露骨に	2.6%	10.8%	<u>76.4%</u>	7.1%
	19	月並みな	2.9%	3.6%	5.4%	12.5%
	20	ねぎらう	16.5%	7.6%	<u>52.3%</u>	14.8%

ようである。また、選択肢3の「しつこく責めること」の選択率も一貫して高い。

45. 蒙昧

45. 蒙昧 は、正答選択肢が5の「何も知らないこと」であるが、全体として選択率は低い。ただし、最上位群の選択率が若干上がっていることから、より高度の語彙力を持つ者のテスト項目としては有効かもしれない。

れない。

48. 卒然と

48. 卒然と は、正答選択肢が3の「急に」であるが、全体として選択率は低い。ただし、最上位群の選択率が若干上がっていることから、より硬度の語彙力を持つ者のテスト項目としては有効かもしれない。

表 5-2 選択肢毎の選択率一(本調査)

項目番号	幹	選1	選2	選3	選4	選5	
21	一途	0.7%	<u>86.4%</u>	9.0%	3.6%	0.3%	
22	さげすむ	<u>84.0%</u>	2.0%	1.0%	9.3%	3.6%	
23	助言	0.3%	7.7%	4.7%	<u>78.0%</u>	9.3%	
24	合点	0.5%	9.8%	3.2%	6.7%	<u>79.8%</u>	
25	自粛する	3.9%	4.3%	<u>89.0%</u>	0.7%	2.0%	
26	矢継ぎ早の	0.8%	6.8%	<u>80.1%</u>	6.0%	6.4%	
27	毅然とした	15.6%	0.7%	0.8%	<u>76.7%</u>	6.2%	
28	つれない	<u>51.5%</u>	7.9%	0.8%	39.4%	0.4%	
29	左遷	1.6%	9.8%	10.4%	5.8%	<u>72.3%</u>	
30	碩学	8.2%	8.6%	20.8%	<u>44.0%</u>	18.4%	
×	31	掣肘	<u>25.2%</u>	14.2%	6.6%	3.5%	50.5%
	32	一蹴する	8.2%	7.2%	8.5%	17.9%	<u>58.3%</u>
×	33	桎梏	3.9%	<u>33.9%</u>	24.5%	35.6%	2.1%
	34	冒涇	28.2%	<u>58.9%</u>	1.3%	1.3%	10.2%
×	35	形而上	<u>8.6%</u>	15.1%	59.5%	10.5%	6.3%
	36	角が立つ	27.7%	<u>62.0%</u>	4.4%	3.9%	2.0%
×	37	鼓舞する	20.4%	19.3%	4.0%	3.6%	<u>52.7%</u>
	38	厭わない	11.0%	<u>56.0%</u>	5.7%	23.9%	3.4%
	39	辟易する	<u>60.3%</u>	12.3%	7.6%	13.9%	6.0%
	40	刹那	6.7%	13.7%	4.0%	2.3%	<u>73.4%</u>

51. 邂逅する

51. 邂逅する は、正答選択肢が1の「出会うこと」であるが、全体として選択率は低い。ただし、最上位群の選択率が若干上がっていることから、より高度の語彙力を持つ者のテスト項目としては有効かもしれない。

2. 一貫して選択率の高い誤答選択肢がある(したがって困難度が高い): 4例

31. 掣肘

図5に示すように、31. 掣肘 は、正答選択肢が1の「自由を妨げること」であるが、誤答選択肢5の「不意打ちをくらうこと」の選択率が高い(表5-2)。ただし、最上位群の正答選択肢の選択率が若干上がっている

表 5-3 選択肢毎の選択率—(本調査)

項目番号	幹	選1	選2	選3	選4	選5
41	のっけから	5.1%	1.6%	3.6%	<u>82.8%</u>	6.9%
42	相好	42.5%	<u>13.1%</u>	35.7%	5.2%	3.5%
43	拮抗する	<u>56.8%</u>	2.2%	25.9%	4.5%	10.6%
44	饒舌	13.2%	4.3%	5.1%	<u>53.9%</u>	23.6%
×	45	蒙昧	28.6%	27.5%	12.7%	<u>15.8%</u>
46	辣腕	9.7%	<u>54.4%</u>	13.9%	11.1%	11.0%
×	47	屈託がない	4.3%	3.1%	9.1%	<u>34.0%</u>
×	48	卒然と	21.7%	4.2%	<u>23.3%</u>	28.6%
×	49	呻吟する	10.8%	<u>12.5%</u>	12.2%	8.9%
50	傾倒する	7.2%	44.2%	<u>40.0%</u>	1.5%	7.2%
×	51	邂逅する	<u>17.6%</u>	6.8%	21.9%	19.2%
×	52	矜持	21.6%	21.4%	<u>39.1%</u>	5.7%
53	僭越	19.7%	3.6%	<u>53.2%</u>	21.5%	2.0%
54	二の腕	46.5%	<u>20.5%</u>	2.2%	22.7%	8.2%
×	55	地道に	0.5%	<u>88.7%</u>	0.9%	0.7%
×	56	血道をあげる	2.4%	71.1%	<u>18.9%</u>	4.3%
×	57	惹起する	4.2%	25.8%	<u>18.4%</u>	45.4%
58	抱腹絶倒	20.5%	4.8%	<u>58.0%</u>	13.4%	3.3%
59	袖の下	17.2%	1.5%	8.5%	<u>70.1%</u>	2.7%
60	無常	26.8%	8.6%	5.7%	20.1%	<u>38.8%</u>

ことから、より高度の語彙力を持つ者のテスト項目としては有効かもしれない。

35. 形而上

35. 形而上 は、正答選択肢が1の「精神的なもの」であるが、誤答選択肢3の「形だけのもの」の選択率が高い(表5-2)。ただし、最上位群の正答選択肢の選択率が若干上がっていることから、より高度の語彙

力を持つ者のテスト項目としては有効かもしれない。

49. 呻吟する

49. 呻吟する は、正答選択肢が2の「うめく」であるが、誤答選択肢5の「検討する」の選択率が高い(表5-3)。特に、上位群になるにしたがって誤答選択肢5の選択率が高くなっている。

表 5-4 選択肢毎の選択率—(本調査)

項目番号	幹	選1	選2	選3	選4	選5	
×	61	怪訝	1.8%	13.6%	<u>62.4%</u>	19.8%	2.4%
	62	息災	4.6%	55.3%	<u>21.5%</u>	5.6%	13.0%
	63	やみくもに	5.4%	2.4%	<u>77.0%</u>	14.2%	1.1%
	64	海千山千	3.1%	7.0%	45.3%	<u>40.9%</u>	3.7%
	65	巧拙	2.6%	7.2%	13.6%	12.8%	<u>63.8%</u>
×	66	難渋	20.2%	3.2%	5.3%	2.0%	<u>69.3%</u>
	67	身柄	0.7%	1.0%	15.6%	13.2%	<u>69.5%</u>
	68	やっきになる	54.5%	5.8%	<u>22.1%</u>	11.9%	5.8%
	69	贅を尽くす	30.0%	6.3%	1.0%	<u>50.6%</u>	12.1%
	70	隔週	24.6%	7.6%	3.2%	<u>55.9%</u>	8.7%
	71	狼狽	3.7%	10.0%	<u>77.6%</u>	5.5%	3.2%
	72	邪険	17.5%	18.4%	1.9%	21.5%	<u>40.8%</u>
	73	他愛ない	8.1%	2.7%	3.9%	<u>83.0%</u>	2.3%

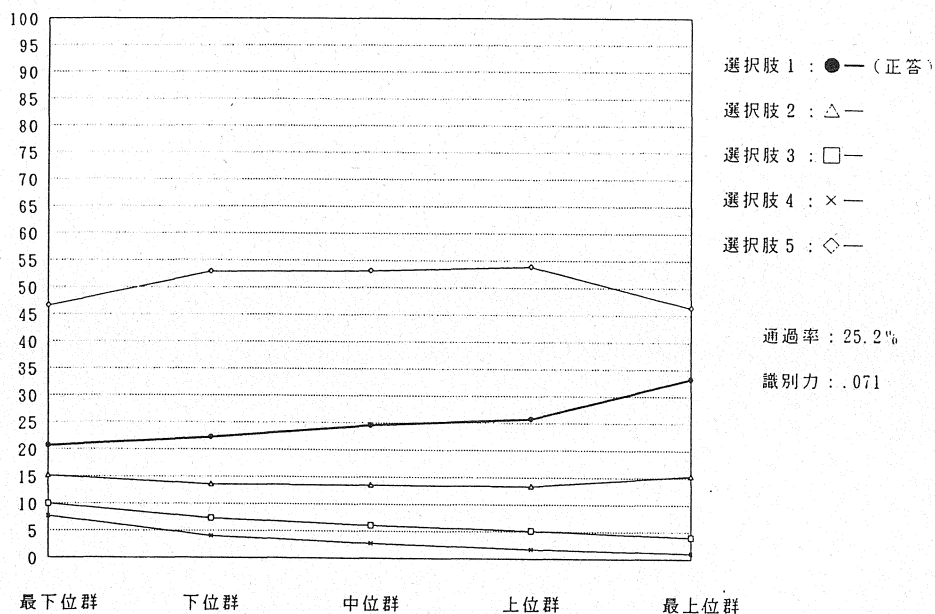


図5. 項目31(掣肘)のG-P分析(不良項目)

表 6-1 選択肢毎の識別力ー(本調査)

項目番号	幹	無答等	選1	選2	選3	選4	選5
1	まどろむ	-0.037	-0.174	-0.073	-0.159	<u>0.292</u>	-0.067
×	2	厳密な	-0.014	-0.057	<u>0.151</u>	0.068	-0.120
	3	拙い	-0.061	<u>0.306</u>	0.031	-0.086	-0.179
	4	皆無	-0.070	-0.132	-0.114	-0.140	<u>0.279</u>
×	5	試案	-0.032	<u>0.055</u>	-0.059	-0.082	0.002
	6	円滑に	-0.043	-0.261	<u>0.399</u>	-0.110	-0.111
	7	たしなめる	-0.070	-0.311	-0.112	-0.049	-0.143
	8	仰々しい	-0.063	-0.195	-0.097	<u>0.363</u>	-0.208
	9	あらゆる	-0.045	-0.173	-0.103	-0.083	<u>0.232</u>
	10	奏でる	-0.070	-0.125	-0.084	-0.193	<u>0.377</u>
	11	風潮	-0.046	-0.174	<u>0.279</u>	-0.095	-0.142
	12	不快な	-0.048	-0.057	<u>0.358</u>	-0.234	-0.192
	13	すこぶる	-0.072	<u>0.367</u>	-0.203	-0.164	-0.207
	14	やましい	-0.037	-0.099	-0.229	-0.003	-0.201
	15	目下	-0.049	-0.136	<u>0.428</u>	-0.209	-0.239
	16	おびただしい	-0.051	-0.301	-0.146	-0.210	<u>0.436</u>
	17	かこつける	-0.061	-0.071	-0.148	<u>0.388</u>	-0.285
	18	露骨に	-0.071	-0.184	-0.252	<u>0.433</u>	-0.136
	19	月並みな	-0.063	-0.050	-0.218	-0.172	-0.269
	20	ねぎらう	-0.061	-0.295	-0.077	<u>0.500</u>	-0.262

56. 血道をあげる

56. 血道をあげる は、正答選択肢が3の「熱をあげること」であるが、誤答選択肢2の「苦勞すること」の選択率が高い(表5-3)。ただし、最上位群の正答選択肢の選択率が若干上がっていることから、より高度の語彙力を持つ者のテスト項目としては有効かもしれない。

3. 困難度が低すぎる項目：2例

55. 地道に

図6に示すように、55. 地道に は、正答選択肢2「着実に」の選択率が最下位群でも80%近い。しかし、上位群に行くにしたがって、正答率は高くなっており、より語彙力の低い者のテスト項目としては有効かもしれない。

表 6-2 選択肢毎の識別力ー(本調査)

項目番号	幹	無答等	選1	選2	選3	選4	選5	
21	一途	-0.041	-0.106	<u>0.326</u>	-0.251	-0.141	-0.071	
22	さげすむ	-0.068	<u>0.358</u>	-0.166	-0.150	-0.183	-0.198	
23	助言	-0.045	-0.057	-0.281	-0.075	<u>0.274</u>	-0.063	
24	合点	-0.052	-0.127	-0.268	-0.199	-0.153	<u>0.409</u>	
25	自粛する	-0.062	-0.250	-0.182	<u>0.380</u>	-0.124	-0.150	
26	矢継ぎ早の	-0.068	-0.097	-0.164	<u>0.367</u>	-0.199	-0.192	
27	毅然とした	-0.078	-0.237	-0.109	-0.124	<u>0.390</u>	-0.229	
28	つれない	-0.060	<u>0.442</u>	-0.158	-0.102	-0.331	-0.075	
29	左遷	-0.074	-0.161	-0.201	-0.227	-0.175	<u>0.435</u>	
30	碩学	-0.069	-0.019	0.014	-0.070	<u>0.187</u>	-0.144	
×	31	掣肘	-0.056	<u>0.071</u>	0.012	-0.085	-0.128	0.031
	32	一蹴する	-0.084	-0.137	-0.159	-0.142	-0.161	<u>0.379</u>
×	33	桎梏	-0.037	-0.010	<u>-0.027</u>	0.065	0.003	-0.072
	34	冒演	-0.094	-0.217	<u>0.381</u>	-0.100	-0.098	-0.199
×	35	形而上	-0.073	<u>0.135</u>	-0.040	0.087	-0.153	-0.046
	36	角が立つ	-0.079	-0.180	<u>0.286</u>	-0.058	-0.154	-0.083
×	37	鼓舞する	-0.083	0.068	-0.149	-0.118	-0.113	<u>0.169</u>
	38	厭わない	-0.106	-0.157	<u>0.446</u>	-0.155	-0.264	-0.088
	39	辟易する	-0.098	<u>0.366</u>	-0.113	-0.217	-0.138	-0.115
	40	刹那	-0.087	-0.188	-0.164	-0.120	-0.093	<u>0.331</u>

63. やみくもに

63. やみくもに は、正答選択肢3「むやみに」の選択率が最下位群でも65%程度である。また、上位群に行くにしたがって、正答率は高くなってはいるが、ゆるやかであり、テスト項目として不適切である。

4. 正答のような傾向を示す誤答選択肢がある項目：2例

47. 屈託がない

図7に示すように、47. 屈託がない の正答選択肢は4「くよくよししないこと」であるが、上位群に行くにしたがって、誤答選択肢5「卑屈でないこと」の選択率が高くなっている。したがって、明らかにテスト項目

表 6-3 選択肢毎の識別力(本調査)

項目番号	幹	無答等	選1	選2	選3	選4	選5	
41	のっけから	-0.098	-0.121	-0.158	-0.130	<u>0.348</u>	-0.222	
42	相好	-0.081	-0.050	<u>0.252</u>	-0.101	-0.019	-0.001	< 30
43	拮抗する	-0.089	<u>0.226</u>	-0.075	-0.095	-0.077	-0.115	●
44	饒舌	-0.101	-0.100	-0.045	-0.125	<u>0.337</u>	-0.210	
×	45	蒙昧	-0.072	0.109	-0.069	-0.084	<u>0.087</u>	
46	辣腕	-0.086	-0.089	<u>0.233</u>	-0.090	-0.102	-0.055	●
×	47	屈託がない	-0.107	-0.157	-0.135	-0.183	<u>-0.044</u>	0.274
×	48	卒然と	-0.080	0.036	-0.168	<u>0.085</u>	0.008	-0.031
×	49	呻吟する	-0.087	0.006	<u>-0.023</u>	-0.026	-0.140	0.127
50	傾倒する	-0.104	-0.137	-0.167	<u>0.306</u>	-0.071	-0.044	
×	51	邂逅する	-0.094	<u>0.159</u>	-0.008	-0.108	-0.076	0.058
×	52	矜持	-0.066	0.020	0.005	<u>-0.015</u>	-0.021	0.033
53	僭越	-0.104	-0.107	-0.103	<u>0.233</u>	-0.072	-0.099	●
54	二の腕	-0.099	-0.130	<u>0.332</u>	-0.023	-0.125	-0.015	
×	55	地道に	-0.100	-0.084	<u>0.190</u>	-0.093	-0.095	-0.110
×	56	血道をあげる	-0.098	-0.097	0.083	<u>0.042</u>	-0.091	-0.061
×	57	惹起する	-0.084	-0.044	0.241	<u>-0.035</u>	-0.138	-0.015
58	抱腹絶倒	-0.117	-0.104	-0.133	<u>0.352</u>	-0.189	-0.157	
59	袖の下	-0.109	-0.252	-0.132	-0.150	<u>0.381</u>	-0.080	
60	無常	-0.107	-0.114	-0.191	-0.047	-0.087	<u>0.325</u>	

として不適切である。

57. 惹起する

57. 惹起する の正答選択肢は3「引き起こす」であるが、上位群に行くにしたがって、誤答選択肢2「志をもつ」の選択率が高くなっている。したがって、明らかにテスト項目として不適切である。

5. 識別力が若干足りない項目：3例

2. 厳密な

図8に示すように、2. 厳密な の正答選択肢2「詳しい」は上位群に行くにしたがって選択率は上がっていくが、十分ではない。

37. 鼓舞する

37. 鼓舞する の正答選択肢5「ふるいたたせること」は特に最上位群の選択率は高

表 6-4 選択肢毎の識別力-(本調査)

項目番号	幹	無答等	選1	選2	選3	選4	選5
61	怪訝	-0.129	-0.119	-0.218	<u>0.397</u>	-0.180	-0.123
62	息災	-0.108	-0.046	-0.107	<u>0.305</u>	-0.209	0.003
×	63	やみくもに	-0.104	-0.014	-0.118	<u>0.172</u>	-0.089
	64	海千山千	-0.112	-0.074	-0.079	-0.083	<u>0.232</u>
	65	巧拙	-0.117	-0.123	-0.109	-0.117	-0.164
×	66	難渋	-0.113	-0.102	-0.161	0.016	-0.086
	67	身柄	-0.105	-0.071	-0.081	-0.182	-0.240
	68	やっきになる	-0.131	0.006	-0.074	<u>0.246</u>	-0.182
	69	贅を尽くす	-0.132	-0.232	-0.152	-0.117	<u>0.428</u>
	70	隔週	-0.121	-0.084	-0.132	-0.074	<u>0.284</u>
	71	狼狽	-0.125	-0.158	-0.188	<u>0.393</u>	-0.192
	72	邪陰	-0.128	-0.123	-0.272	-0.119	-0.053
	73	他愛ない	-0.108	-0.198	-0.145	-0.206	<u>0.378</u>

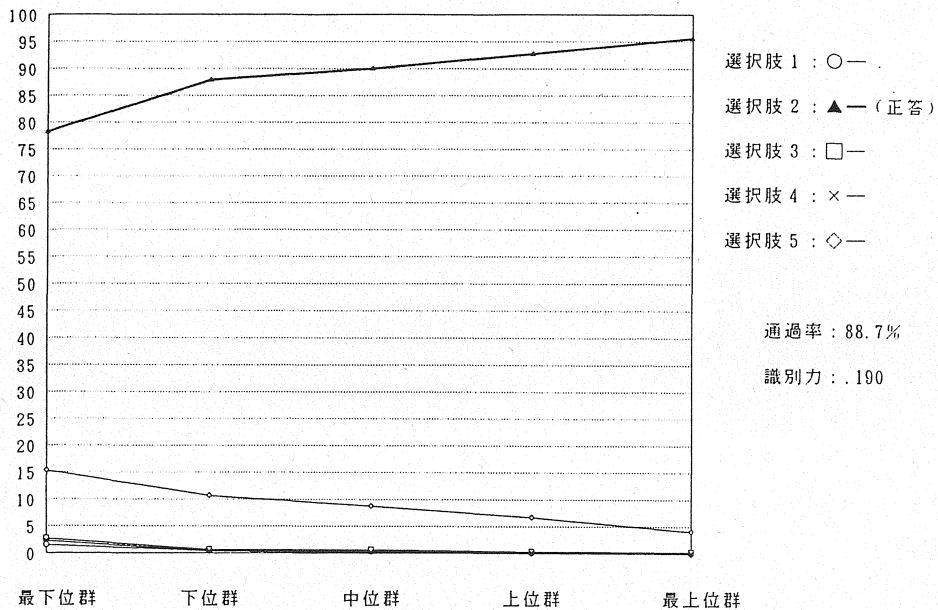


図 6. 項目 55 (地道に) の G-P 分析 (不良項目)

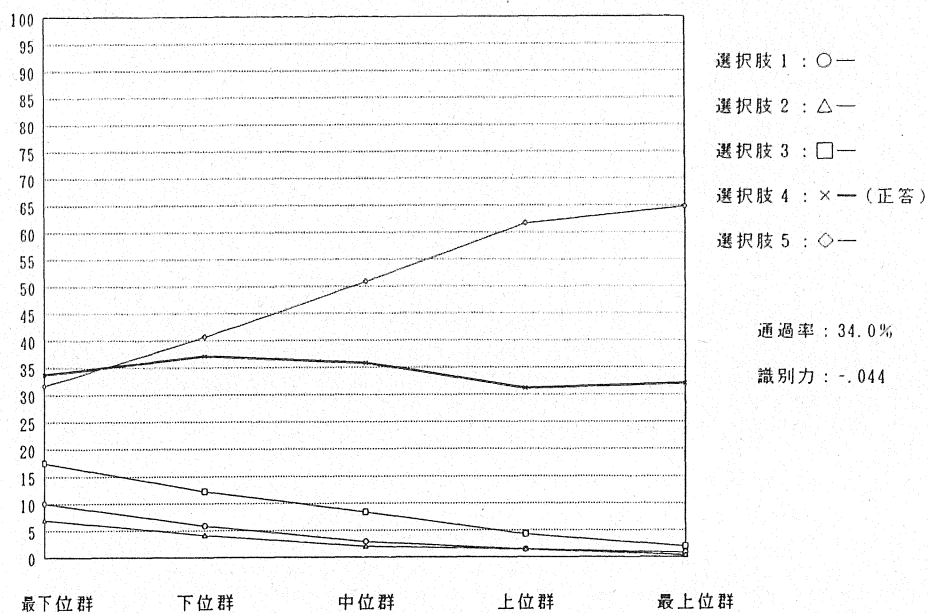


図 7. 項目 47 (屈託がない) の G-P 分析 (不良項目)

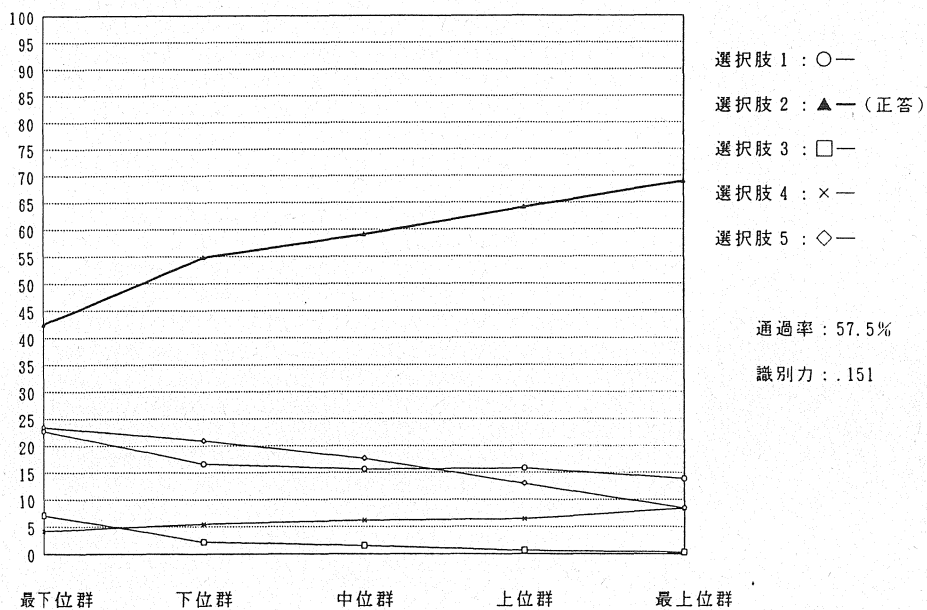


図 8. 項目 2 (厳密な) の G-P 分析 (不良項目)

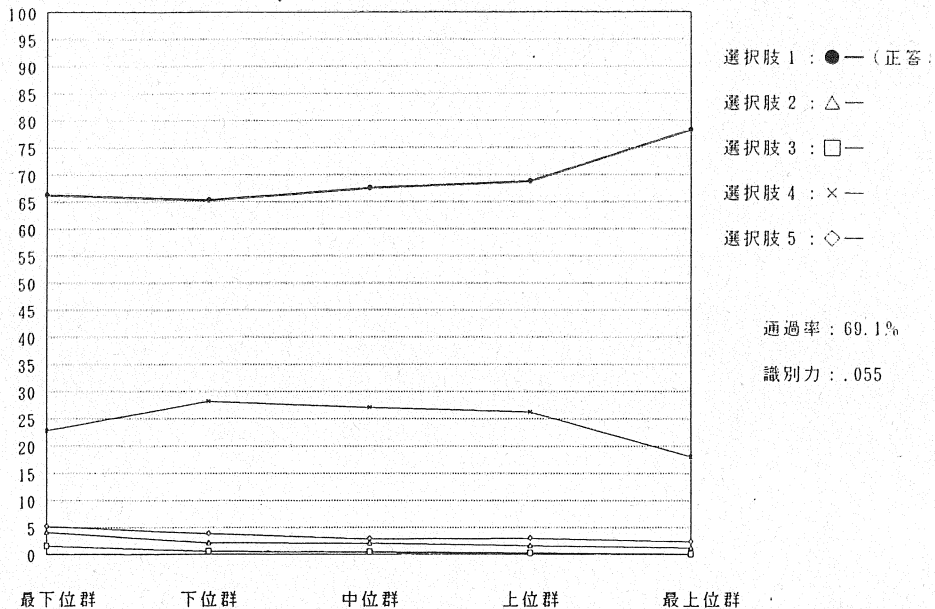


図 9. 項目 5 (試案) の G-P 分析 (不良項目)

いが、十分ではない。

66. 難渋

66. 難渋 の正答選択肢 5「難しくて苦労すること」は上位群に行くにしたがって選択率は上がっていくが、十分ではない。

6. 識別力がなく、その理由も不明な項目：2 例

5. 試案

図 9 に示すように、5. 試案 の正答選択肢 1「試しに作った計画」は一般的に選択率は高いが、最上位群を除いて識別力が全くなく、テスト項目として不適切である。

52. 矜持

52. 矜持 の正答選択肢 3「誇り」は一般的に選択率はチャンス・レベルを越えているが、識別力が全くなく、テスト項目として不適切である。

2. 良好項目の性質

不良項目 17 項目を除いた場合、良好項目

56 項目の得点率は平均 61.52, 標準偏差 17.55 (平均 34.45 点, 標準偏差 9.83) と変化した。比較的困難度の高い項目が多く除かれたようである。識別力は平均 .35, 標準偏差 .07 であった。

良好項目 56 項目の得点率の分布は、80～90 が 5 項目、70～80 が 14 項目、60～70 が 11 項目、50～60 が 12 項目、40～50 が 5 項目、40% 未満が 6 項目であった。識別力の分布は、.25 未満が 1 項目、.25～.35 が 18 項目、.35～.45 が 30 項目、.45 以上が 1 項目であった。

良好項目として残された項目のうち、中学生用の項目と共通なものは 21 項目ある。

識別力から見た良好項目の性質は以下の三種類に分類できる。なお、以下の図 10～図 12 の G-P 分析の図は、不良項目を除いた 56 項目の総合得点の情報をを用いて被験者を群に分類したものをを用いている。分類に関する情報は、表 7 に示す通りである。

表7 G-P 分析の群分類 (不良項目削除後)

	得点	人数	百分率
最下位群	0～26点	4075 人	22.3%
下位群	27～32点	3641 人	19.9%
中位群	33～37点	3420 人	18.7%
上位群	38～43点	3504 人	19.2%
最上位群	44～56点	3653 人	20.0%

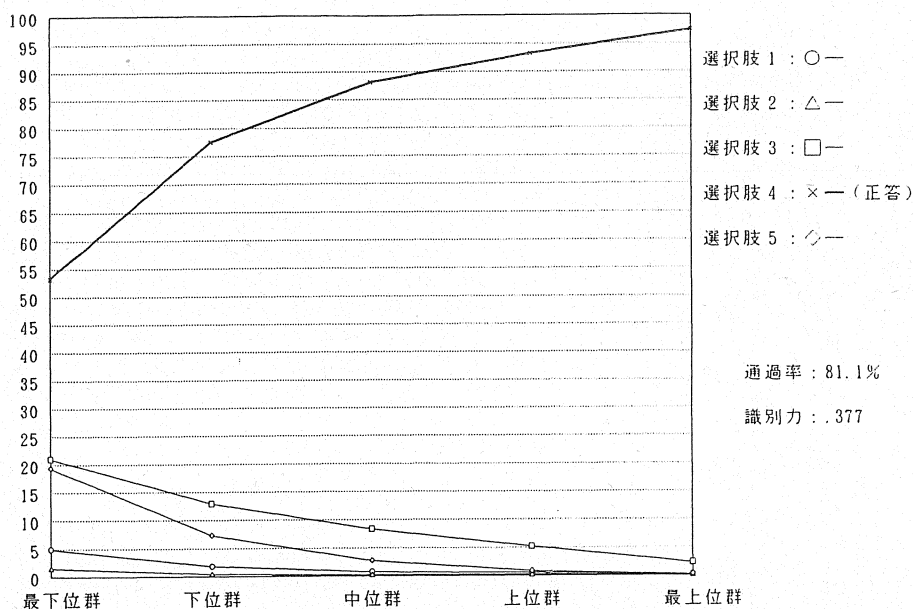


図10. 項目10 (奏でる) G-P 分析

- 主に下位群の識別力が高い項目 : 19 例
10. 奏でる (図10), 11. 風潮, 12. 不快な, 13. すこぶる, 14. やましい, 15. 目下, 16. おびたしい, 18. 露骨に, 19. 月並みな, 21. 一途, 22. さげすむ, 23. 助言, 24. 合点, 25. 自粛する, 26. 矢継ぎ早の, 27. 毅然とした, 41. のっけから, 59. 袖の下, 73. 他愛ない.
- 主に上位群の識別力が高い項目 : 11 例
7. たしなめる (図11), 42. 相好, 44. 饒舌, 50. 傾倒する, 53. 僭越, 54. 二の腕, 60. 無常, 62. 息災, 64. 海千山千, 68. やっきになる, 72. 邪険.
- 全体的に識別力がある項目 : 26 例
1. まどろむ (図12), 3. 拙い, 4. 皆無, 6. 円滑に, 8. 仰々しい, 9. あらゆる,

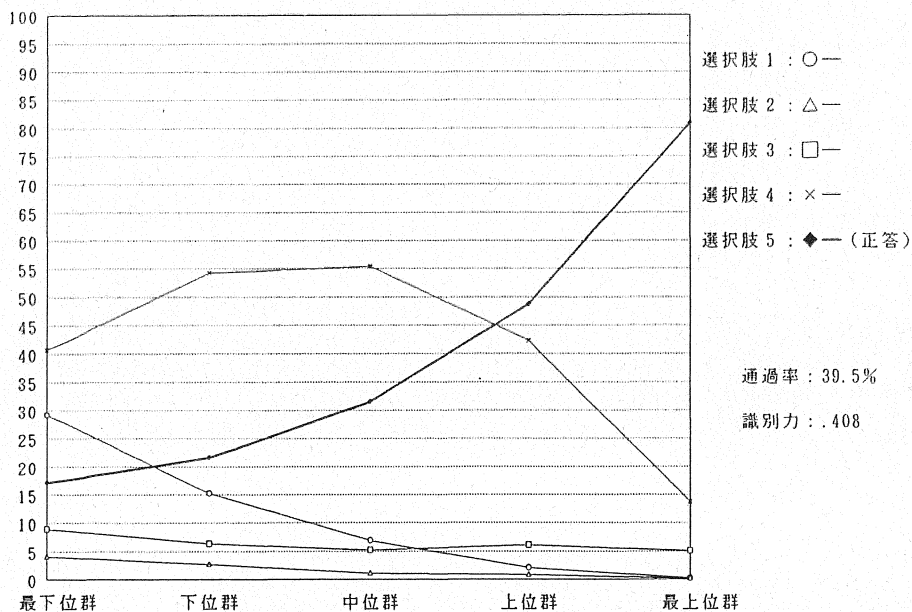


図 11. 項目 7 (たしなめる) の G-P 分析

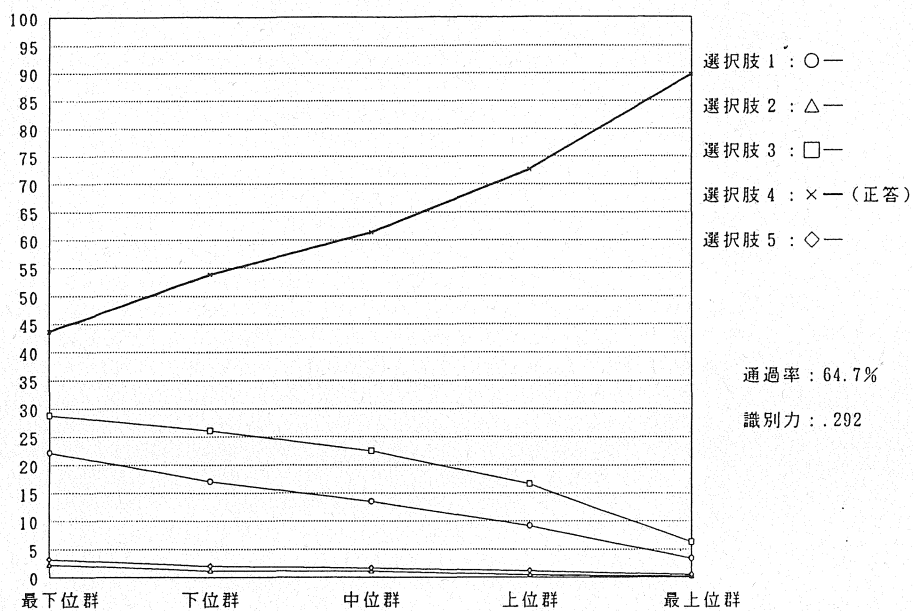


図 12. 項目 1 (まどろむ) の G-P 分析

17. かこつける, 20. ねぎらう, 28. つれない, 29. 左遷, 30. 碩学, 32. 一蹴する, 34. 冒瀆, 36. 角が立つ, 38. 厭わない, 39. 辟易する, 40. 刹那, 43. 拮抗する, 46. 辣腕, 58. 抱腹絶倒, 61. 怪訝, 65. 巧拙, 67. 身柄, 69. 贅を尽くす, 70. 隔週, 71. 狼狽.

V. 考 察

本調査の結果, 56 項目が高校生用日本語語彙理解力テストの項目として適当であるということが認められた。被験者は, 18,000 人を越える大規模なものであり, 全国のいわゆる一流進学校から, 職業高校の生徒を含む高校生としては幅広い語彙能力を持った集団である。したがって, これらの項目の特性は信頼

(予備調査)

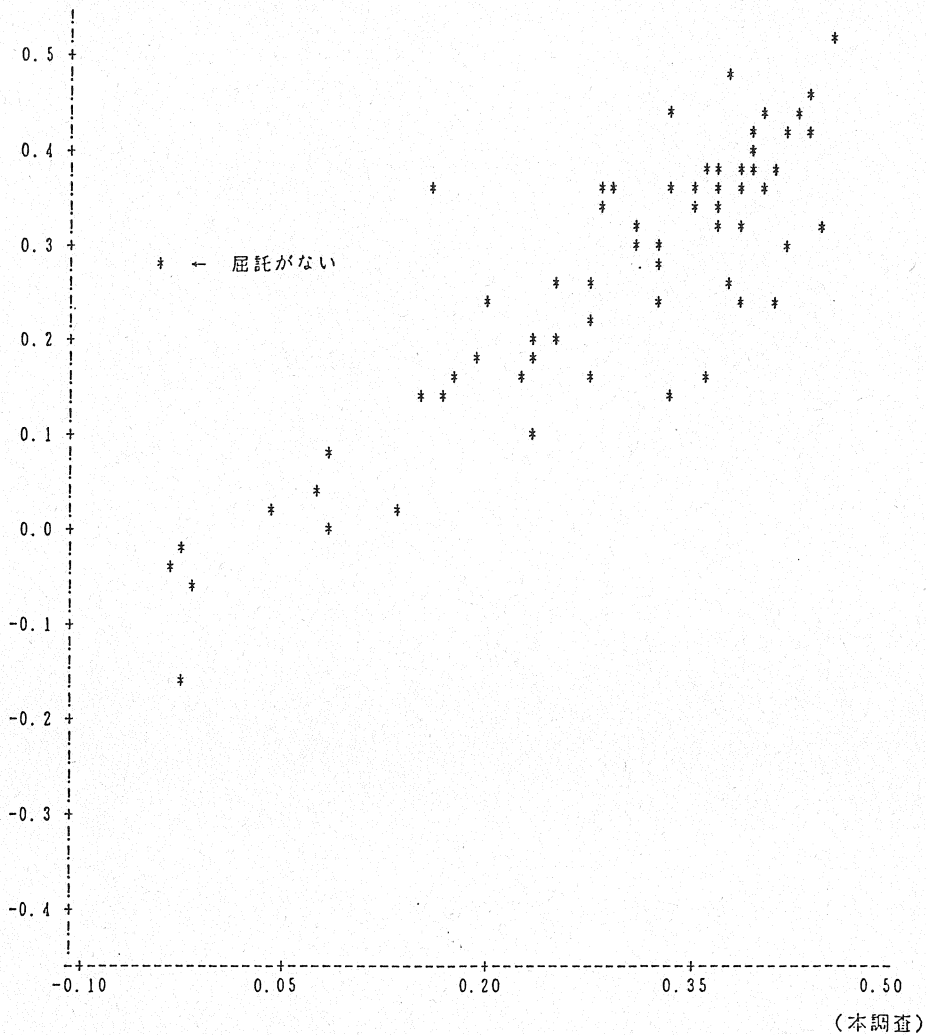


図 13. 予備調査と本調査の識別力

性の高い安定したものであると考えることができよう。

しかしながら、本研究の手続きとして、予備調査から項目を選択する際に、通常のように識別力ではなく、主に困難度に注目して選択をしたのは、問題があったと言えるかもしれない。予備調査を実施した学校は、学力的にあまり水準の高い学校ではないという事前情報があったための措置であったが、実際は本調査を実施した学校の平均的な水準と同程度であったと思われるからである。実際、入力ミスがあった1項目と改良を加えた1項目を除いた71項目の識別力の予備調査と本調査の相関係数は、.84 とかなり高く、明らかに外れ値である「47. 屈託がない」(予備調査の識別力 .272, 本調査の識別力 -.044, 図 13 参照)を除くと、.89 にまで上昇する。このことは、項目選択を行う際に、識別力を重視すべきであったことを意味すると思われる。しかしながら、今後、高校生用日本語語彙理解力テストの完成に向けて、II. 研究の目的 のところで述べたように、項目を増やしていく必要があるが、予備調査と本調査の識別力の相関の高さは、逆に言えば、適切なサンプルに基づく調査を行えば、今回の本調査のような大規模な調査を行わなくとも、良好な項目が得られるかもしれないという期待を抱かせる。さらに、予備調査の段階ではじかれた項目の中で識別力が高かったものは、再び調査を行う際に用いることが可能であると思われる。

次に、中学生用の項目と共通な項目が21項目含まれていることから、尺度の等化は比較的容易で安定したものが得られると期待できるであろう。

最後に、今後の展望としては、高校生段階の帰国子女の語彙能力の測定に実用化するためには、高校生用としては困難度の低い項目

から高い項目までまんべんなく項目を増やしたものを用意していく必要があると思われる。今後は、新しいテスト項目を作成し、今回作成した項目を含んだ様々な水準のテストバッテリーを作成する。そして、それぞれ予備調査にかけた後、中程度のサンプルサイズ(今回の経験から1,000名~2,000名程度が適当か)による本調査を繰り返していくことにより、その目的を達成したい。

謝 辞

今回の研究を進めるにあたり、被験者として協力していただいた計29校の高校生と、授業時間を裂いて調査に協力して下さった担当の先生方に心から感謝したいと思います。また、マークシートのMT入力作業を指導して下さいった大学入試センター事業部情報処理課の安達昇さん、様々な実務で御尽力いただいた管理部庶務課共同利用係長の佐々木義人さんにお礼を申し上げたいと思います。また、論文の執筆にあたり、様々な意見を下さった、研究開発部の皆様に感謝したいと思います。最後に、ワープロ作業やデータの発送などで協力して下さった高瀬道さん、手島穂寿美さん、幸渕史さん、田上佐江子さんに心からの感謝をしたいと思います。

参 考 文 献

- 小野 博 1989 海外帰国児童・生徒の英語と日本語語彙力の変化 異文化間教育, Vol. 3, 35-51
- 小野 博, 繁樹算男, 林部英雄, 岡崎 勉, 市川雅教, 木下ひさし, 牧野泰美 1989 日本語力検査の開発昭和61-63年度科学研究費報告書試験研究(1)課題番号6181003
- 芝 祐順 1978 語彙理解尺度作成の試み 東京大学教育学部紀要 Vol. 17, 47-58

芝 祐順 編 1991 項目反応理論 基礎と応用
東京大学出版会

The Word Book Dictionary 1974 Doub-
leday & Company inc. 41-63

Tomoichi ISHIZUKA*, Naoki TAIRA*, Tomesaburo
SIMIZU**. A comparative study on the forms of
answers to test-items in the area of social sciences.
Res. Bull. Nat. Cent. Univ. Ent. Exam., No. 21, 1-33.

This is a report of the part pertaining to the area of social sciences made in the second year of a research project for 'a comparative study on the effects of answer-forms in test-items'.

Primary objective of the project is experimental clarification of aspects of scholastic abilities that are easy or difficult to be measured by test-items of multiple-choice type. The result should assist complementary utilization of both multiple-choice and free response types in examinations.

Selected are three subjects of Japanese history, World history and Geography which are taken by comparatively large numbers of pupils in the National Center Tests. Two appropriate sets, called A and B, are compiled from items of the past Tests of each subject which are of multiple-choice type. Then they are edited into corresponding two sets of free response type.

Equal numbers of fresh persons in a university are recruited from majors of both arts and sciences for answering to these tests. They are divided at random into two populations, named P and Q. In order to discriminate scholastic abilities of these two populations, common items of multiple-choice type are added to both sets.

While a combination of the set A of multiple-choice type and the set B of essay type is given to the population P, remaining combination is given to the population Q. Thus each student is given both sets and both types.

Major finding based on an analysis of the response of the students is that both types have almost same powers of the identification of scholastic abilities. It is thus confirmed that claims of ineffectiveness about multiple-choice type are unreasonable.

However, it goes without saying that the power of multiple-choice type is also limited, and that complementary utilization of essay type is always recommended.

Key Words

free response type, and multiple-choice.

* *Examination Method Section*

** *Information Processing Section*

Fumiyasu YAMADA*, Norio SUZUKI**, Hideki TOYODA***, Tomesaburo SIMIZU*. A comparative study on the forms of answers to test-items in the area of natural sciences. *Res. Bull. Nat. Cent. Univ. Ent. Exam.*, No. 21, 35-57.

This is a report of the part pertaining to the area of natural sciences made in the second year of a research project for 'a comparative study on the effects of answer-forms in test-items'.

Primary objective of the project is experimental clarification of aspects of scholastic abilities that are easy or difficult to be measured by test-items of multiple-choice type. The result should assist complementary utilization of both multiple-choice and free response types in examinations.

Selected are three subjects of Physics, Chemistry and Biology which are taken by comparatively large numbers of pupils in the National Center Tests. Two appropriate sets, called A and B, are compiled from items of the past Tests of each subject which are of multiple-choice type. Then they are edited into corresponding two sets of free response type.

Equal numbers of fresh persons in a university are recruited from majors of both arts and sciences for answering to these tests. They are divided at random into two populations, named P and Q. In order to discriminate scholastic abilities of these two populations, common items of multiple-choice type are added to both sets.

While a combination of the set A of multiple-choice type and the set B of free response type is given to the population P, remaining combination is given to the population Q. Thus each student is given both sets and both types.

Major finding based on an analysis of the response of the students is that both types have almost same powers of the identification of scholastic abilities. It is thus confirmed that claims of ineffectiveness about multiple-choice type are unreasonable.

However, it goes without saying that the power of multiple-choice type is also limited, and that complementary utilization of essay type is always recommended.

Key Words

free response type, and multiple-choice.

* Information Processing Section

** Evaluation and Follow-up Section

*** Scholastic Aptitude Section

Terumasa IKEDA*, Sigeru YAMAMURAA** and Kozo IWATA*** (1992). Characteristics in Achievements Profile of College Applicants through High School Senior Year — A Case Study of one Public High School —, *Res. Bull. Nat. Cent. Univ. Ent. Exam.*, No. 21, 59-79.

The purpose of this study is to examine the relationship of achievement profiles of college applicants during high school senior year to the achievement profile at the time of the Joint First Stage Achievement Test, and to determine how their achievement profiles would influence students' college choices of academic fields as well. Achievements are composed of five subject areas: Japanese, Mathematics, Foreign Language, Sciences, and Social Studies. Based on the achievement scores of the five subject areas, the ten types of achievement profiles are defined as the combination of his/her two highest scores. Therefore there are following ten types of profiles: 'Jap. & Soc.', 'Jap. & Fore.', 'Soc. & Fore.', 'Jap. & Sci.', 'Jap. & Math.', 'Soc. & Math.', 'Soc. & Sci.', 'Fore. & Math.', 'Fore. & Sci.', 'Sci. & Math.'. For this purpose, a public high school which adopts a kind of curricular track called 'Bun Kei' and 'Ri Kei' was taken as a suitable case.

The main findings are as follows:

- (1) There are some tendencies about the relationship of the students' achievement profiles in relation to the time of tests taken. 'Jap. & Soc.' and 'Jap. & Sci.' and 'Sci. & Math.' of the ten types have consistently higher percentages.
- (2) As for differences in achievement profile between 'Bun Kei' and 'Ri Kei', the percentages of 'Jap. & Soc.' and 'Jap. & Sci.' and 'Soc. & Sci.' students are higher in 'Bun Kei', while the percentages of 'Sci. & Math.' and 'Jap. & Math.' students are higher in 'Ri Kei'.
- (3) Relating to changes of achievement profile of individual students, 'Jap. & Soc.', 'Jap. & Fore.', 'Jap. & Sci.' and 'Sci. & Math.' tend to stay in the same types.

*Admissions System Section, **Admissions System Section, ***Evaluation and Follow-UP Study Section, Research Division, National Center for University Entrance Examination.

- (4) The students were classified into the consistet group and the unconsist-ent group in term of college choice of academic fields. The unconsist-ents belonging to the 'Ri Kei' have some strong possibility of having 'Jap. & Soc.', 'Soc. & Fore.' and 'Soc. & Fore.' types.

Key Words

Achivement Profile, Five Academic Sub-jects, the Ten Types of Profiles, College Applicants, College Choice of Academic Fields

Kozo IWATA*, A Follow-up Study of High School Students' College Choice. *Res. Bull. Nat. Cent. Univ. Ent. Exam.*, No. 21, 81-106.

It is the important factor of college choice for high school students, what kind of faculties do they wish to enter. It is also so which type of higher education do they wish to be given, either 4-year universities or 2-year junior colleges, and either public universities or private universities in Japan. This paper aims to analyze the process of such a college choice by means of follow-up study in the case of a certain high school.

Main findings are as follows:

- (1) More than 3/4 of students at this school wished the same kind of faculties between first choice and second choice at any point during 2nd and 3rd year grade at senior high school.
- (2) A lot of students majoring humanity or social science at high school consistently wished faculties of humanity or social science during 2nd and 3rd year grade. A lot of students majoring natural science at high school consistently wished faculties of natural science. One of the reasons of this tendency seems that the students in this sample high school had to choose such a major when they got their remove to the second year grade.
- (3) There were few students majoring humanity or social science at high school changed their choice from the faculties of humanity or social science to the exact ones of natural science.
- (4) There were the students majoring natural science at high school changed their choice from the faculties of natural science to the ones of humanity or social science. They changed their choice to faculties of economics, education or home economics, many of whose entrance examinations they could make the most of mathematics which they favored.
- (5) The students who applied public 4-year universities had better at all five subjects (Japanese, English, mathematics, social science, natural science) than the students who did not apply public 4-year universities. But the latter did the best to study five subject though many private universities and 2-year junior college required only three subjects at the entrance examinations.

Key Words

College Choice, Follow-up Study, High School Students.

*Evaluation and Follow-up Study Section.

Naoki TAIRA*, Hiroshi ONO**, Hideo HAYASHIBE***.
Development of a Japanese Vocabulary Comprehension Test for Senior High schoolers—(1) Selection of trial items. *Res. Bull. Nat. Cent. Univ. Ent. Exam.*, No. 21, 107-135.

Recently, the number of children who come back to Japan after some years spending abroad with their family is rapidly increasing. Not a few of them need a special educational care for their Japanese ability. Therefore, it is important to develop a convenient test measuring their ability of Japanese language.

Ono et al. (1989) made criteria for some domains of Japanese language, such as vocabulary, grammar, composition and Chinese characters, for elementary school and junior high school pupils. It is comparatively easy to make tests of vocabulary and Chinese characters for advanced level. On the other regions, most of those abilities are completed before entering senior high school. As for composition, it is quite difficult to make a computer based test.

The present study is aimed for making a part of test items of Japanese vocabulary comprehension test for senior high schoolers. We had two steps for making and refining test items. Preliminary investigation and main investigation.

First, we made 90 items including some for junior high schoolers. The reason is that the items for senior high schoolers shall be calibrated with those for juniors in the future.

The preliminary investigation was conducted for 270 female senior high school pupils of a private school in Tokyo area May 1991. We selected 73 items for main investigation, after Classical Test Theory based item analysis.

The main investigation was conducted for about 18,000 examinees of 28 high schools in whole country, including 3 top level private schools in Tokyo area, 21 second class public high schools, 1 commercial school and 3 agriculture schools.

The first analysis was a basic one. The rate of hitting right answer was 54.49% in average, standard deviation was 12.53. It can be regarded that we succeeded to construct an standard test for senior high schoolers. Next, we did two types of item analysis. We took a point biserial correlations of each item and total score into account. At the same time, we divided subjects into 5 groups according to their total score (each group including 3,300~3,900 subjects), and compared the rate of hitting right answer. Consequently, we regarded 56 items as good enough.

Items for elementary school and junior high school pupils have already been calibrated based on Item Response Theory. We are going to calibrate new items based on IRT, and combining with old ones in the next step of this study. After that, we will develop more items, and construct an item pool having some hundreds of items. Finally, we will make an adaptive testing program using the item pool, and make use of that for guidance of returnees and for studies of their verbal development.

Key words

vocabulary comprehension test, item analysis

* *Examination Method Section*

** *Special Examination Section*

*** *Faculty of Education, Yokohama National University*